

忽然と誕生し、幻のように消えた明治維新の城
菊間水野忠敬5万石藩庁舎

明治元年（一八六八）、駿河沼津城主水野忠敬が封地五万石（駿河・越後・三河・伊豆の四国）のうち、二万七千石を上野市原郡に移された。これにより菊間台地の菊間村に陣屋を置いて藩庁とする。台地は村田川南岸にあり、西に江戸湾を望むことができた。

陣屋跡は今、農地、ゴルフ場、民間企業敷地になつており、藩庁跡は小公園である。周辺は宅地化されていく。遺構は見当たらない。（菅井靖雄）

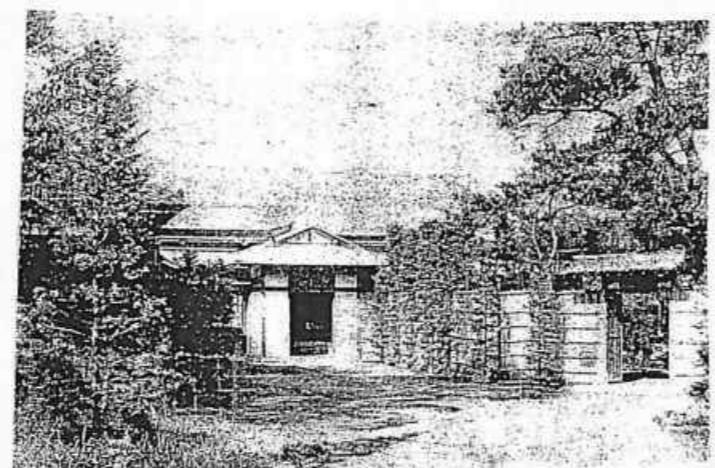
菊間陣屋
Kikumajinja (千葉県原市)

水野氏（16代）5万石 駿河沼津より丸に立ち沢渡

アクセス
J内房線沼津駅からバス

年表
明治元（一八六八）水野忠敬、徳川家達の駿河府中転封に伴い入封。陣屋を築く。





山岸弘明

→水野忠敬、忠寛父子



旧藩士会の水野父子



市原市八幡地区の菊間台地に「菊間城（藩庁）跡」がある。古代「菊麻国造（くくまのくにみやつこ）」の本拠で数十基にもおよんだ「菊間古墳群」の一部が現存して県や市の文化財に指定されている。明治維新のころ、一寒村であったこの地で突如として、水野藩5万石の城造りが始まり、旧領沼津から移り住んだ藩士家族およそ2千人を中心とした「惣構え城下町」が忽然と誕生、しかしはかなく消える運命にあった。

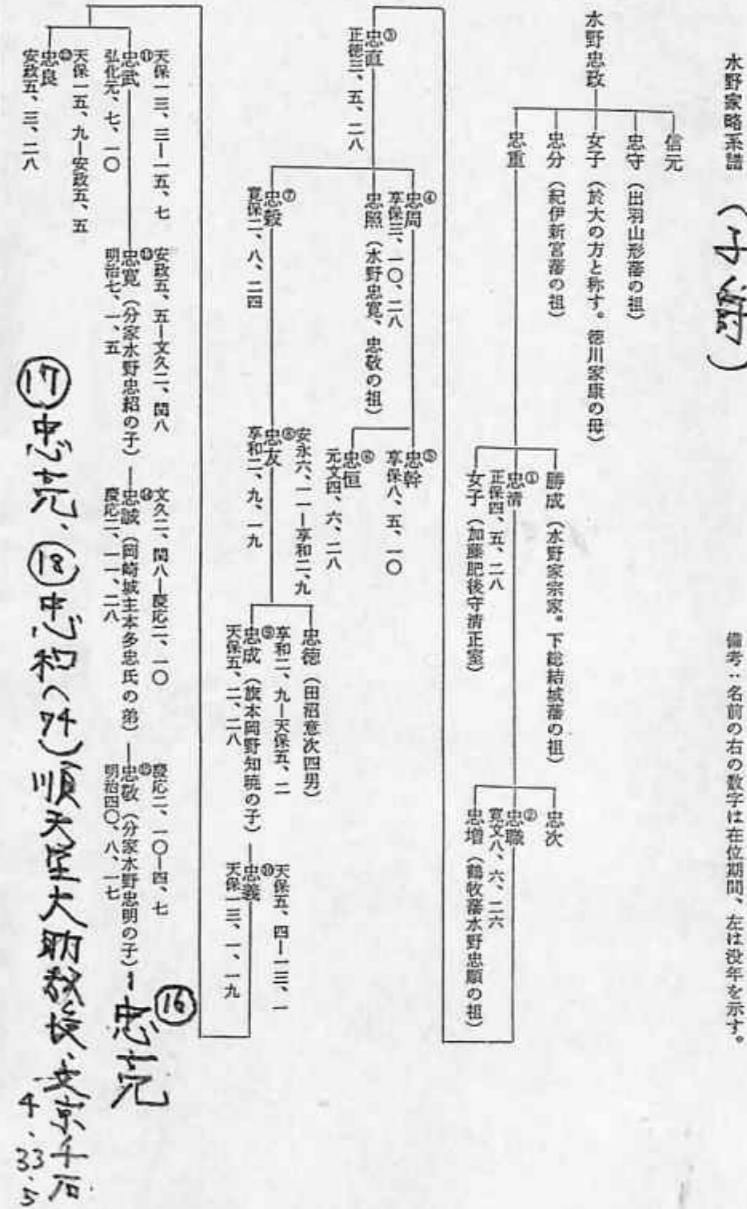
水野家は江戸時代、徳川家康の生母・お大の実家で將軍家の外戚として重きをなした。慶応4年（1868）「鳥羽伏見の戦い」に敗れた15代將軍慶喜が退陣し、紀伊の徳川龜之助（家達=いえさと）に駿府70万石が与えられた。この結果、沼津5万石を領有した水野忠敬（ただのり）の本領駿河国内2万3千石が上地され市原への転封が命じられたのは年号も明治と新たまったこの年7月13日のことであった。

水野家は13代將軍家定の側用人で井伊直弼の側近として活躍した13代忠寛（ただひろ）が「桜田門の変」後失脚したので養子の忠誠（ただのぶ）が継ぐが、忠誠も慶応2年（1866）14代將軍家茂の老中としてしたがった「第2次長州征伐」の陣中で急死し、再び分家

水野忠明の3男忠敬を養子に迎えることとなった。

水野沼津藩は慶応4年「明治戊辰の戦い」が始まると尾張徳川慶勝の指令下に入って恭順し、人馬継ぎ立て、佐幕急進派の鎮圧などにあたった。市原転封時、養祖父忠寛かぞえ62才、忠敬は18才、藩の実権は忠寛が握っていた。

7月27日、忠寛と忠敬は沼津城引き渡しのためいったん伊豆の戸田村へ移り、8月市原へ拝領地受け取り方兼境界測量方、総普請方、屋敷割り測量方などを派遣、房総知県事芝山文平から市原の所領を引き継いだ。新城縄張りの総指揮官として忠寛が船で八幡港に到着したのは9月27日早朝であった。忠寛は八幡称念寺などを宿陣として城地検討を始める。最終的に比高15mほどの高台に立地する菊間台の地が決まる。新政府から移封による築城経費として3年間、玄米1千石と金1万5千両が下賜されることになった。村田川から城地に通じる巨大空堀（資材引き上げ道）が完成、大手新坂が開削され、公廨（くがい=仮藩庁舎力）大殿様御殿（下屋敷力）医局が完成した。望楼（医局？）最高層には時刻を告げる鐘が取り付けられ、鐘声は村内の隅々にまで響いたという。



*

しかし、時世は大きく移り代わりつつあった。明治2年2月、江戸改め東京にあって推移を見守っていた忠敬は諸藩主とともに「版籍奉還」を願い出、6月菊間藩知事に任命されたがいったんこれを辞退、慰留されたりもした。

明治2年7月26日供揃いを整えて初めての国入り。しばらく若宮八幡神社神主根本神官宅に居住した後、明治4年2月本丸一画字台に新築した忠敬邸に移った。それは石垣、水濠を巡らせた旧領沼津城とは比較できない質素な陣屋造りであった。

菊間城の主郭部分は字雲の境と呼ばれた台地崖上に立地、空堀と土塁を巡らせ、門を築き、土台を回した段階で明治4年7月に「廃藩置県」となった。

*

築城工事は中止され藩主家族は東京に招集された。藩士を気づかう忠敬は八幡銀行（国立銀行）を開設、大規模な開墾事業を支援するがいずれも成功しない。職を失った藩士らは一人また一人、櫛の歯が欠けるように離散していった。

大殿御殿や公廨は明治6年の「廃城令」で廃棄されたが、工事で集められた木材や瓦はのち千葉県庁に転用された。医局は菊間村役場となり、藩校「明親館」は初代菊間小学校に、忠敬邸は水野家別荘として戦後まで利用され、忠敬の子爵家を継いだ忠亮が学友たちとテニスを楽しむ姿もみられたという。

菊間廃城後およそ150年、いま菊間城跡に立つと一面が夏草に覆われた畑と所どころに民家が散在する。かつてこの地に巨大城郭の建設が進められたことなど、すっかりと忘れ去られたかのように時代の経過だけがかった。忽然と誕生し、幻のように消えた菊間城、「つわものども」の跡地にたたずんで歴史の「無情」と「はかなさ」を感じるのは筆者一人なのであろうか。

主要関連年表

慶応4年(明治元年=1868)

- 1月3日*鳥羽伏見の戦い勃発、幕府軍敗走
1月12日*徳川慶喜江戸城に帰る
2月5日 沼津藩、尾張義勝に勅皇誓約
2月9日*東征軍、江戸へ進撃を開始
2月12日*慶喜、上野寛永寺に閉居
2月29日 先鋒隊到着、街道警護、継ぎ立て水野忠敬、甲府城代を命じられる
4月11日*江戸無血開城、慶喜は水戸へ退去
5月21日 預かりの遊撃隊に脱走され罷免、謹慎
5月24日*徳川家達宗家を相続、駿府70万石
5月24日 忠敬に所替え内示
7月13日 " 移封先、市原郡と決定
7月11日*江戸を東京と改称、あいまい遷都
7月27日 忠敬家族ら伊豆戸田村へ移る
8月 藩士も戸田村などへ仮移転
" 市原へ拝領地受取方兼境界測量方派遣
" 房総知県事から所領を引き継ぐ
8月22日 領地替え経費として1万3千両を借用
8月23日 沼津の領内郷村を引き渡す
8月26日 上総新封の警守を命じられる
8月30日 沼津城引き渡し
9月6日 新封警守のため水野藩兵市原に着任
9月8日*明治と改元する
9月 測量方、総普請役、屋敷割りなど派遣
9月8日*年号が「明治」となる
9月16日 忠敬、新政府に出頭、お礼言上
9月21日 上総転封の正式辞令交付
9月27日 忠寛、東京を昨夕乗船、早曉八幡着、称念寺を宿陣に現地指揮をとる
10月ころ 藤田屋などを「仮陣屋」とする
10月 八幡村、陣屋招致入用負担申し合わせ
" このころ城地決定、築城開始か
" 一部所替え、市原郡は13,680石となる
10月13日 領内に「申し渡しの覚え」を通達

- 12月17日 領地替え経費3年間1,000石、1万5千両ずつ下賜決定
12月ころ 組合村、高反別など書き上げ提出
10~12月 沼津藩士が相次いで転入、邸地を作る
明治2年(1869)
1月 忠敬、供揃いで江戸入り、上屋敷へ
2月19日 忠敬ら版籍奉還を願い出る
3月4日 忠敬、羽後守叙任
5月18日*五稜郭が投降し、戊辰戦争終わる
6月19日 版籍奉還、忠敬は菊間藩知事に任ず
6月20日 忠敬、藩知事の辞表を提出
6月26日 藩知事家禄は実高の10分の1と決定
7月7日 忠敬、説諭され菊間藩知事を拝受
7月26日 " はじめての国入り、千光院へこのころ 神官根本邸に移転
9月 大浜支庁服部純着任、旧弊改正めざす
明治3年(1870)
1月3日 武士の俸祿削減、菊間藩は士族20石に
2月25日 大手筋新坂入札、407両で弁次落札
3~4月 医局でほうそう種痘
4月25日 忠敬、供揃いで勝馬村方面村々を巡見
7月12日 新道普請完成。経費は近隣村々が負担
12月15日 公廨(こうがい=役所)上棟式
12月19日 " 郡中村々へ備餅配付
12月25日 村々農事休日を制定
12月27日 公廨に引き移り
この年 藩校「明親館」を新築する
明治4年(1871)
2月 一部所替え
2月1日 重臣ら八幡から領内廻村
2月24日 忠敬邸棟上式
3月8日 大浜支庁で「大浜騒動」起こる
7月14日 廃藩置県。菊間県誕生、県庁とする
築城工事を中止
7月15日 忠敬、藩知事を免じられる
7月20日 忠敬、忠寛ら家族、東京に移る
11月13日 菊間県などを統合、木更津県となる

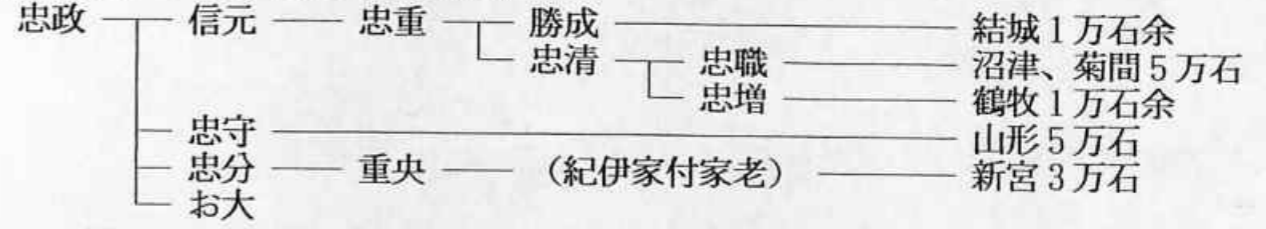
菊間藩の誕生と築城

1) 沼津水野忠敬(ただのり)に上総転封が命じられる — 菊間藩の誕生

- ①慶応4年5月24日、田安亀之助(家達=いえさと)による徳川宗家相続が認められ、駿府70万石が与えられた。
②同じ日忠敬は「追って所替え仰せ付けられ候あいだ、かねて用意これあるべき旨」内示、7月13日、国替え先が市原郡の内八幡村を含む23,700石と決まる。
*このほかの三河国領(大浜陣屋)1万3千石、伊豆国領7千石、越後国領(五泉陣屋)1万1千石は移動なし
③徳川宗家駿府藩成立にともなう転封藩は7藩であった(*印が市原郡)
房総は幕府の台所で、およそ40万石にも及ぶ幕府直轄領と旗本領が移封先となった。
*駿河国沼津藩→上総国菊間藩=水野忠敬5万石
" 小島藩→" 金崎藩(後に桜井藩)=松平滝脇信敏1万石
" 田中藩→安房国長尾藩=本多正納4万石
*遠江国浜松藩→上総国鶴舞藩=井上正直6万石
" 掛川藩→" 芝山藩(後に松尾藩)=太田資美5万石
" 相良藩→" 小久保藩=田沼意尊1万石
" 横須賀藩→" 花房藩=西尾忠篤3万石

2) 徳川家康の生母お大の実家 — 華麗な水野家の系譜

①水野家は徳川家康の生母お大の生家で、大名家が4家、紀伊徳川家家老のほか旗本奴の十郎左衛門家など旗本家も多く出た。



②沼津、菊間家は勝成の弟・忠清に始まる。秀忠に仕えて松本6万石となるが、6代忠恒のとき江戸城中で刃傷事件を起こして改易、大伯父の忠毅に名跡相続が認められて7,000石が与えられた。8代忠友は10代将軍家治に信任されて老中、加増を重ねて沼津3万石となり、忠成も老中で5万石に定まった。

*諸侯年表=享保10年7月28日忠恒発狂し毛利主水正正師に傷つくるにより領地没収、秋元伊賀守喬房に預けらる。8月27日家の由緒を御思召され信濃国佐久郡の内において7,000石を忠毅に賜る
*寛政譜、忠友の加増=明和2年1,000石、5年5,000石、安永6年7,000石、天明元年5,000石、5年5,000石。あわせて沼津3万石。忠成の加増=文政4年1万石、12年1万石。あわせて沼津5万石

Table with columns: 地名, 転封年月日, 藩主名(通称), 石高(安永・上総代地分), 藩庁所在地(現市町村), 備考. Lists various domains and their details.



Historical maps and diagrams showing the locations of Shimizu Castle and the Naito family's residence (沼田家所有). Includes a caption '沼田家所有 木野宗系図'.

3) 側用人水野忠友が復活した武田勝頼の海城 —— 沼津城跡を1昨年に見学

①武田勝頼が築いた海城にはじまる=沼津城の前史

長篠の戦いに破れた武田勝頼が、天正5年(1577)本国甲斐と駿河湾を結ぶ軍事拠点として築城、鹿野川を外堀に川水を引き込んで4重の水濠を回した。5年後に小田原北条氏が攻め落とし、さらに徳川家康が奪うが江戸はじめ大久保忠佐が無嗣廃城となった。

②安永7年(1777)水野忠友が三枚橋城旧地に沼津城を再建 —— 城は鹿野川を背に2重の水濠に囲まれ、本丸に天守相当の3重櫓、2の丸、3の丸に2基の2重櫓と太鼓櫓を上げた。

③明治維新後、城主が居住した2の丸御殿はしばらくの間、沼津兵学校として使われたが、まもなく東京に移転し、石垣や水濠も火災や戦災、大規模な都市計画などですべて取り壊された。現在本丸跡は中央公園とされ、本丸跡碑、兵学校跡碑、三枚橋城石垣などがわずかに往時を偲ばせている。

4) いったん伊豆の戸田村で築城を待つ —— 沼津の家屋を解体して菊間へ運んだ

①慶応4年7月27日、城地、所領引き渡しを迫られた忠敬はいったん上知の対象外であった伊豆の戸田村への立ち退く。

*沼津史談⑥=水野の殿様は家族とともにこの御用河岸から舟に乗り、町の人たちの見送りを受けて戸田村へ向かった

*岡田程八日記=明治元年7月26日、両殿様(忠敬、忠寛)明暁七つ時御供揃え(中略)このたび御所替えにつき御領分のうち御領分の内豆州戸田村七右衛門方へ両殿様[]御乗船にて入らせられる

②戸田村は高281石、小さな寒村に多くの家臣らも移転した。かれらは在村の百姓家を借りたが、1軒に複数家が間借りしたり、畳建具もない部屋や土間で雨露をしのいだ。

*沼津史談⑥=家臣や家族たちも7月27日の藩主立ち退きにともない、住みなれた侍屋敷を離れ、城外の郷村に家や居間を借り受け、順次転封地を待つことになった

*市原市史=藩士の中には農家のそれも畳や建具などもないような部屋まで割り当てられた。仕方なく元の居宅の残品をかき集めてそれぞれ分配しようやく凌いだともいわれる

②年号が明治に改まったこの年10月から翌1月、菊間での築城工事進展にあわせ藩士の菊間移転は波状的に始まった。移住にあたり家屋を解体して移築するものも少なくなかった。船で八幡宿の浜本に陸揚げ、そこから小船に積み替えて菊間城下に運ばれた。菊間城の建設が本格化していった。

*民政裁判所あて届け=沼津家臣団、侍屋敷 105、惣長屋56、密数(世帯) 385、人数男 1,181、女 1,188。江戸在住家中、世帯97、男 170、女156

③明治2年1月、忠敬は供揃いを整えて戸田村を出立、江戸に向かう。忠敬はしばらく江戸に止まり、はじめての国入りは7月26日になった。

*沼津史談⑥=明治2年正月、水野藩は同じ駿河国から転封の西尾、田沼、太田などの諸藩の行列は数十日間つづき、街道はその間人馬の絶える時がなかった

5) 菊間陣屋か菊間藩庁か、はたまた菊間城か —— 築城工事はじまる

①史書の多くは「菊間陣屋」とし、「菊間藩庁」もあるが「菊間城」はない

*「市史」や「城郭大系」は藩庁、総覧類は陣屋が多いが太田氏の場合は松尾城も多い
*「広辞苑」は陣屋を「城郭のない小藩の大名の居所」、藩庁を「知藩事が事務をとった役所」とする

*「城」と「陣屋」の区分はあいまいで規模や形で判断されている。本来、大名の家格で、たとえ1万石でも城主格なら城、3万石でも在所大名なら陣屋という

*水野家支藩の鶴牧藩は1万 5,000石城主格、鶴牧城を名乗ったが、一般に陣屋が多い

③水野家は5万石城主で陣屋大名ではない。築城時は城を目指したと考えられる。菊間藩庁も正しいが「菊間城」と呼び変えたいものだ。

6) 所領引き継ぎと築城準備 —— 現地の総指揮は大殿忠寛がとった

①慶応4年8月、知県事柴山文平から上総国の新領2万3千石余を引き継ぐ

*寄留者明細短冊=田所嘉文。慶応4年8月、旧藩転国の際代官役相勤め総国拝領地受取方かつ藩地境界測量方申し付けらる

②このころ現地へ測量方、総普請役、屋敷割り測量方などを派遣、

9月27日大殿様(隠居先々代藩主)忠寛が八幡宿に到着、築城の総指揮をとったとみられる。忠寛をはじめ八幡称念寺を「宿陣」とした。

*水野忠寛(ただひろ=文化4年~明治7年)=出羽守、側用人で井伊直弼側近。桜田門の変後、健康を理由に隠居し、養子忠誠(ただのぶ)に家督を譲った。忠誠は幕末期若年寄、老中となるが第2次長州征伐途次で病死し、養子忠敬を最後の藩主に迎えた。忠敬はまだ若く、実権は義祖父の忠寛が握っていた。

*佐野彪家所蔵、海士有木村年番名主文書「諸用向き日記」=明治元年9月28日廻状、八幡仮御役所。大殿様昨二十六日東京府御乗船のところ八つ時過ぎ滞りなく八幡村御着船、それより御旅館新左衛門宅へ御着遊ばされ候

*同書=10月1日。なおもってこの先触れ、村々早々継ぎ送り(留り村の)郡本村より八幡村称念寺まで宿陣へ相達したまうべく候(中略)八幡村称念寺宿陣、内田郷宿村より、水野出羽守内鎌倉治郎作

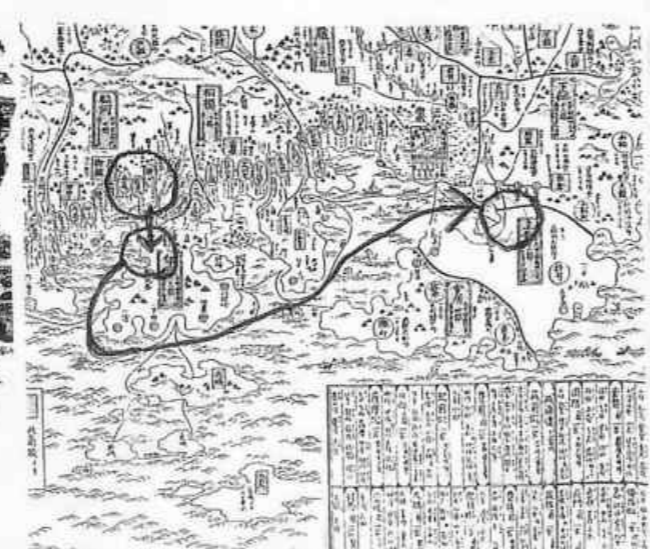
*岡田程八日記=年月日無記(明治2年?)、大殿様上総国八幡駅称念寺へ仮移り

③忠寛は明治2年?、城内徳永台の字柳谷に土塁、空堀で囲んだ自らの住居、通称御殿を建造して移転。

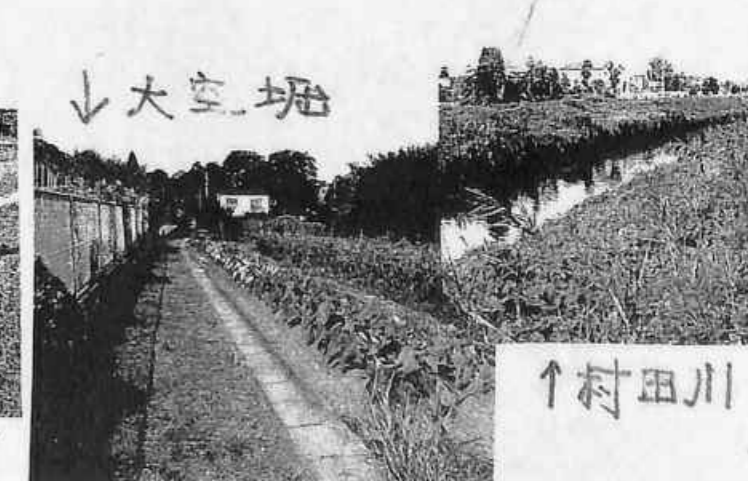
*菊間2657~2684番地のおよそ5千坪、一部土塁残欠あり、空堀跡の地形がわかる

④ 藤田屋(八幡竹内家)は沼津城に飾られていた水野家の「おもだか紋」を所蔵されている。藤田屋は水野家の仮陣屋とされた。沼津から派遣された役人たちは藤田屋のほか、本陣名主宅、八幡宮神官宅、前出東屋、寺院なども役所や宿舎として使用されたのではないだろうか。

*竹内氏によると土地の測量や町割りの仕事にあたる先遣隊が仮陣屋とした。今は壊していないが、正面の真ん中に黒光りのする大黒柱があり、そこに木彫りの水野家のおもだか紋が掲げられていたという。直径39cm、厚さ7cmの重厚な家紋は今も私の家で保存している。裏に北という字が書かれ、沼津城の本丸の北側に掲げられていたものと考えられる。



Handwritten diary entries from the 'Okada Hachirohichi Diary' (岡田程八日記) describing the castle's construction and the transfer of the daimyo's residence.



7) 謎多い菊間城縄張り — 明治4年廃藩置県、未完成で終わる

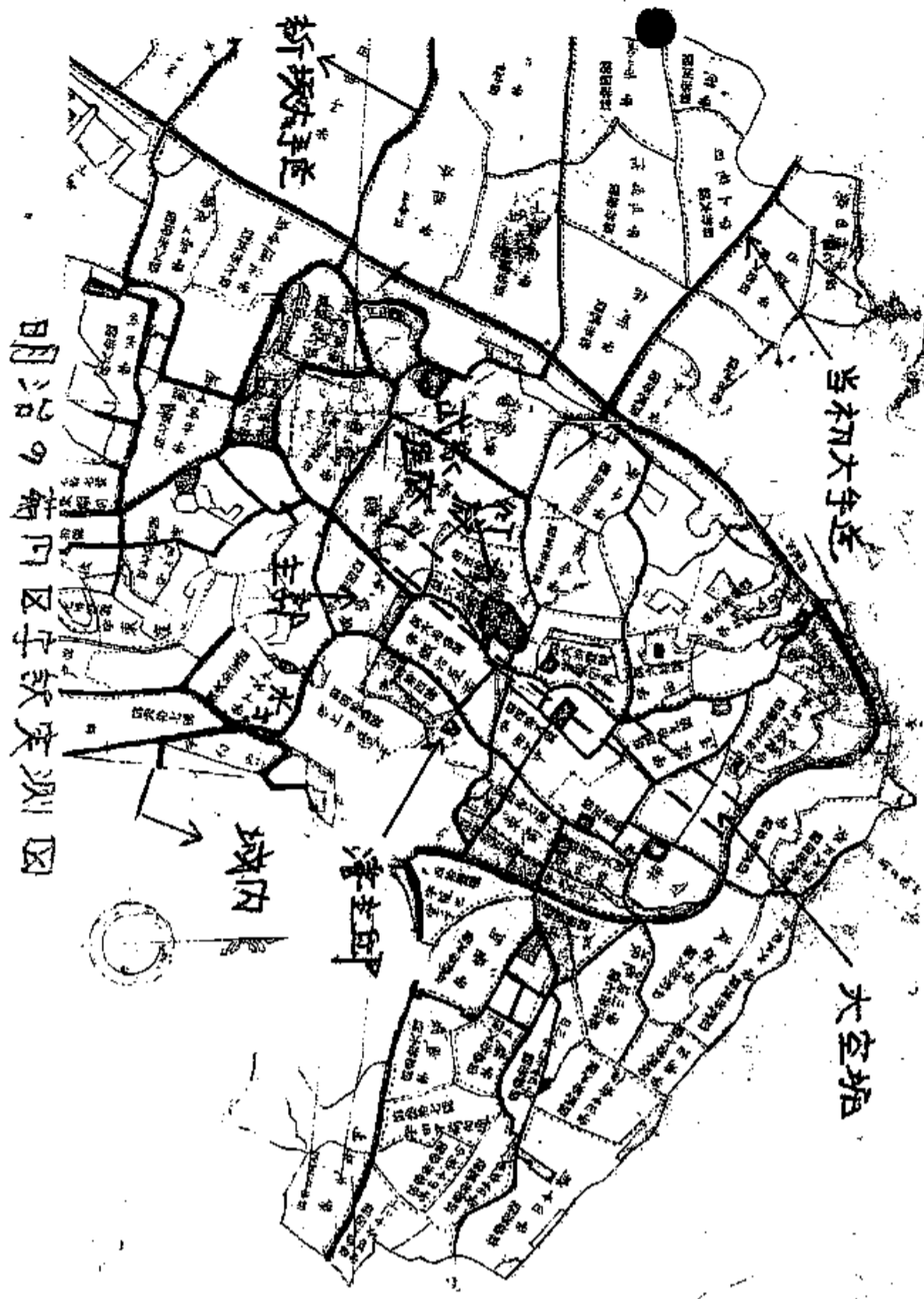
- ①明治元年10月ころ城地を菊間台と決定、築城工事が始まる。明治の新体制がスタートしたとはいえ、東北地方では戦乱が続き、この先まだまだどうなるかわからない。城作りは当初、前任地の沼津城をイメージした5万石城下の築城であったといえよう。
*菊間台はかつて古代豪族として村田川一帯を支配した「菊麻国造(くくまのくにのみやつこ)」の本拠で、台地はおおむね平坦、北野天神山、菊間天神山、東関山、姫宮など数十基の古墳が現存している
- ②菊間は海陸交通の要衝地・八幡に近く、村田川に接した比高10mほどの高台先端に立地する。迷うことなく即断できたのではないか。下記寺島家文書は招致活動の一端を伝えている。
*明治元年10月、八幡村名主連名から好次郎あて一札=今般御陣屋御取り立てに相成りやにつき、右の段たまたま御取り合わせの儀、御頼み申し上げ候ところ、御聞き済み下しおかれ(中略)しかる上は諸入用何ほどにても滞りなく出銀仕るべく候(経費は心配なく招致活動を進めてほしい)
- ③菊間城は菊間台地全域におよんだことは事実だが、図面や記録もなく工事の概要は不詳。寺嶋家や近郷村々の名主文書に含まれる可能性もあり、引き続き重要課題といえる。
- ④鶴舞藩など同時期房総地方に転封された他藩とくらべ工事の進展が遅れがめだった。藩の財政事情もあったが、時勢の推移を見極めたことも重要な要素となった。忠敬は江戸に留まって中央の動きを見定める。明治2年1月、薩長土肥の4藩主が連名で「版籍奉還」を願い出、2月諸藩主もこれになった。版籍奉還が認められ旧藩主に藩知事が命じられたのは6月、こえて明治4年7月「廃藩置県」が断行された。
*「版」は領地、「籍」は人民をいう。藩も領主もない。明治維新の第1ステップといえる。明治2年1月国替えの途について忠敬が江戸に留まったことと築城工事の遅れは無関係とはいえない
- ⑤菊間築城はこうした時代背景の中で始まった。中央の動きをみながら居城作りも進めるという、青信号から黄信号へ、テンポダウンしていったことが想像できる。
- ⑥明治4年7月廃藩置県、藩庁の建築は土地を造成し、土台を回した段階で中止となった。
- ⑦明治維新時点での工事進捗状況は
藩主邸(字台ほか敷地およそ1,500坪=明治4-2上棟)御殿、庭園、土塁、空堀(古写真参照)
隠居御殿(字柳谷=明治2年?)御殿、庭園、土塁、空堀
藩庁舎(字雲の境=工事開始後中止)
公がい(仮藩庁舎?) (場所?=明治3-12上棟)
医局(字雲の境=明治2年?)
松翁稲荷(字雲の境、忠霊塔の地=明治元年12月浜町下屋敷から移築)
藩校明親館(字向原、小湊バス折り返し地?=明治3年?)

- 大手新坂(字座主窪=明治3-7)
水沼(濠)(字下北戸=明治2年ころ)などであった。
*菊間藩士岡田程八日記、ある水野藩士の生活記録=藩庁の建築に先立ち、そこには壮大な層塔を建てた。その最高層には時鐘を取り付け、一振すれば村内ことごとく時報を感じするなどの装備を具備していた。雲の境には2階建ての医局も建設されていたがこの建物はのち菊間村役場として明治33年10月の暴風雨の日まで用いられた
*深山家文書、菊間藩御用覚=明治3年12月17日。去る15日御公がい御上棟につき郡中村々御備餅1組ずつ下し置かれ候あいだ、明後19日四つ時印行形持参致し遅延なく割元会所へ御出張なられべく候
- ⑧「千葉市史」によれば、藩庁舎に使用する予定で集められた材木や瓦は「千葉県庁」の新築工事に使用された。

- 8) 土塁や空堀から縄張りを推定 — 遺構や地籍図、伝承にみる菊間城
- ①縄張りや工事の詳細を伝える資料は現存しない。遺構や地籍図、伝承から推定したい。
- ②城地概要=台地全域を城地に? 「四神相忘」? 縄張り
城地を2分する巨大空堀=沼津から運んだ資材を村田川から陸揚げ道として整備伝大手道(当初の計画道)と新坂大手道(八幡村中心部に直結)
*3の丸(武家地)、2の丸、本丸(城地)、外郭(総構え)に分けられなくもない
- ③藩庁舎(字雲の境)=工事建前を終え、土台を回した段階で中止された。
本庁舎は完成しなかったが、公廨(仮藩庁舎カ)、2階建て医局、宏壮な層楼(2重または3重の鐘櫓)などの記録が残っている。
地形や地籍図、伝承から雲の境城地を推定する。
*公廨=明治3年12月17日上棟、27日引き移り(勝間・深山家文書)
*土塁、空堀、医局跡、建物、門、道敷など
- ④大殿様(忠寛)邸(通称御殿=下屋敷カ)=明治2年ころ完成
*土塁、空堀、道敷から御殿跡を推定
- ⑤藩主(忠敬)邸=明治4年2月棟上げ、住居を移す
*未発表古写真を発見、簡単な建物、鶴舞井上6万石、松尾太田5万石など同時移封の房総諸藩庁舎もほぼ同クラス
- ⑥忠敬仮住居(旧若宮八幡宮神官邸)=江戸後期建物を昨年春取り壊した
現存文書調査解読中。写真は入手したが忠敬関係文書はなかった。
- ⑦武家屋敷(上級藩士)武家長屋(大半は沼津から持参した古材で仮設)現存なし
- ⑧藩校(明親館)初代菊間小学校をへて現在はバス折り返しターミナル
- ⑨五の字道、升形などに武家屋敷街が残る
- ⑩水濠(現在は水田)

以上





明治の菊岡区宇敷実測図

明治16年測量の菊岡区四圍図



9

菊岡塔庁舎跡
 子聖の公園図(現在メモ)

道線の道3=近世の道
 水野当野
 作, 尾(直い)

(古塔)ミジ
 水ボツト?

(明治図) 平成21-12

(古塔)神社跡地
 現忠魂碑

(古塔) 木
 土壁に架つ
 2042-1 (1/3)
 医局跡
 (古塔) 旧菊岡村役所

(古塔)
 土壁

ガケ地

表内跡?
 土壁、ボツ?

明治16年
 以後の土壁

山本
 古尾
 古尾
 古尾

(古塔)
 土壁なし?

ガケ地

カラス?

八幡史子館史料

10

天狗党の筑波騒動を鎮圧するため、藩兵が出動する。藩主頼宣の影響を受けて、元治元年の春に、五人の藩士が江戸の沼津藩邸を出奔した。五十四日、神谷房次郎、鹿地福太郎、高野善太郎、服部弁内である。彼らは沼津に立ち寄り、藩邸を破壊して逃げた。他に築山、南原の柏崎又四郎も脱藩した。

神谷と鹿地は入牢中に病死し、服部、五十川、高野は家臣としての勤めに励むようになって許された。

第二次征長が起り、慶応二年五月、藩主水野忠純は上洛の供養を命ぜられ、七月十一日大坂に着いた。二日後、老中に任せられ、直ちに征長軍の先鋒総督に従うことになり、八月十一日、広島に着いた。

將軍家茂は七月二十日、大坂城で病死したが、水野忠純も九月十四日、広島で急死した。原因ははっきりしない。この死は内訌にされ、遺骸を十月二十八日江戸に運び、ようやく死を公表した。

鳥羽伏見戦後の二月八日、先鋒総督府の使者として、熊本藩士二人が沼津へ来て、藩の重役一人を指名まで差し出すようにと伝えた。これより前の五日に、三州大兵陣に結んで来た藩士の遠藤八郎は、尾張藩からの勤王勧誘に対し、「何となくならず、尾張藩の指揮を受ける」という要約をしていた。

二月二十九日、駿府に到着した先鋒総督は、藩主水野忠純に甲府城代を命じた。忠純は藩士二百二十六人と従夫三千人をひきいて甲府に行き、松代藩兵と交代して勤務した。甲府は天領であって、藩府の旗本が甲府勤番として在勤していたから、旧藩軍がここに結集して東山道を進んで来る官軍を迎え撃とうという動きがあった。柴田監物ら旧藩兵もそういふ動きの中の一つとして、甲州藩沼で松代藩兵と戦い、捕えられて、忠純に引き渡された。また甲府には、旧藩府の勤番・小菅清、与力・同心など総計四百三十人はかりがいて身の振り方に困り、動揺していた。忠純は藩士に一隊を派遣するなどして、旧藩軍の動静を把握することに努めたが、藩兵だけでは弱体であるため、松代藩、掛川藩の援兵を得ることにした。

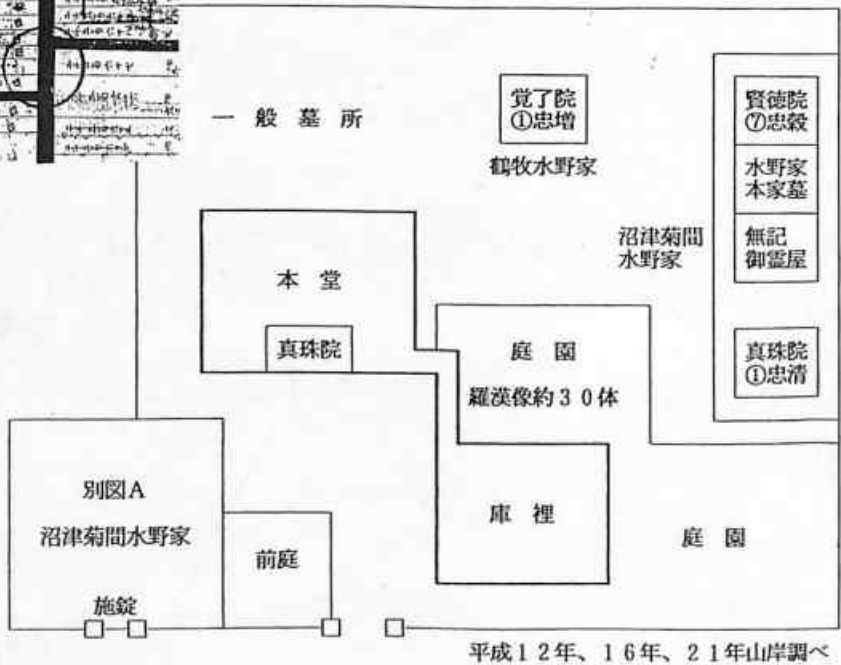
上総沼津藩主の林昌之助(藩士約五百五十人は遊撃隊と称して、道路相模野を襲撃して真鶴に上陸し熱海に出た。伊庭八郎・人員湯太郎ら十五人はほどは沼津藩の探察の者に会い、土肥に退いた。一隊は沼津藩を説得して事をあげるよう努め、一隊は沼津に向かい、小田原領内に進んだ。沼津・小田原・田中・岡崎の諸藩が出て一掃につとめ、大目付山岡鉄太郎と石坂周吉が沼津藩を説得を行ない、遊撃隊は水野忠純の監督下におかれることになった。林昌之助ら二百二十人は、香貫村蓮山寺とその付近

幕末から明治はじめの水野藩江戸屋敷

- 上屋敷の変遷
 天保5-4~安政6-3 外桜田=霞が関1
 安政6-3~文久2-10 大名小路=丸の内1
 文久2-10~" 2-12 浜町=浜町2
 " 2-12~" 3-12 四谷御門内
 " 3-12~慶応2年 西久保
 慶応2年 不詳(拝領なしカ)
 " 3-10~明治はじめ 本所大川筋
 現在=墨田区横網町1=国技館前一带
- 中屋敷の変遷
 宝暦10-8~安政6-8 浜町(後出変更)
 安政6-8~明治はじめ 北八丁堀
 現在=中央区二本橋兜町=阪本小、公園
- 下屋敷の変遷
 天保14-2~万延元-9 芝二本榎
 万延元-9~明治はじめ 蠣殻町
 現在=中央区日本橋蠣殻町=商業地、ビル
 安政6-8~明治はじめ 浜町(唱え替え)
 現在=中央区人形町2=ビル、マンション



水野家菩提寺=真珠院
 文京区小石川3(元伝通院末)



平成12年、16年、21年山岸調べ

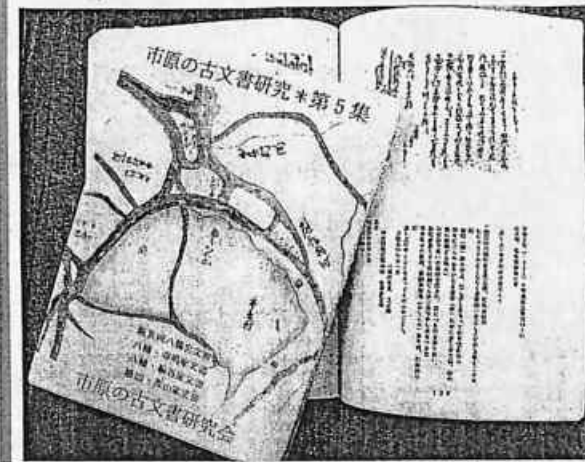
柔頼院 ⑤忠恒	徳本院 ⑤忠伴	智徳院 ④忠周	賢徳院 ③忠直	道樹院 ②忠職	庵墓塚 水野家諸精舎
慈雲院 ⑥忠恒	敬善院 ⑧忠友	修徳院 ⑨忠成	徳徳院 ⑩忠成	⑩忠義 ⑪忠寛	常徳院 ⑬忠良
敬善院 ⑧忠友	修徳院 ⑨忠成	徳徳院 ⑩忠成	⑩忠義 ⑪忠寛	光徳院 恒徳院 ⑪忠武	陽玄院 春香院 得生院 法從院 悟信院 増秋院

沼津菊間水野家(寛政譜6-55=54,000石)主要墓所
 ①忠清=真珠院殿前布護署源朝臣勝全忠居士(宝徳印塔およそ4m=正保4年)
 ②忠職=道樹院殿信誓上昌玄白大居士(変形宝徳印塔およそ2m=寛文8年)
 ③忠直=賢徳院殿前布護署大誓再生全提大居士(〃=正徳3年)
 ④忠周=智徳院殿前布護署祐本蓮社光阿大居士(〃=享保3年)
 ⑤忠伴=徳本院殿前四位下前[],心誓仁炎大居士(〃=享保8年)
 ⑥忠恒=慈雲院殿前布護署口誓求道謙性大居士(〃=元文4年)
 ⑦忠成=水野忠文家墓、賢徳院殿前羽州刺史仁誓徳口端心大居士(〃4m=寛保2年)
 ⑧忠友=修徳院殿前布護署仁口翁大居士、駿州沼津城主従四位侍従前出羽守忠友墓(変形宝徳印塔およそ2m=享和2年)
 ⑨忠成、⑩忠亮合祀=頼徳院殿前光誓成業融隆大居士、駿州沼津城主従四位侍従前出羽守源忠成公(忠亮の碑銘を省略)(〃=天保5年、昭和8年)
 ⑩忠義、⑪忠寛合祀=共徳院殿前寛誓泰安義山大居士、温徳院殿前寛誓泰安義大居士(〃=天保13年、明治7年)
 ⑪忠武=恒徳院殿前源赤然然曜武大居士、駿州沼津城主従五位下前羽州刺史源忠武墓(〃=天保15年)
 ⑬忠良=常徳院殿前善安義道大居士(〃=安政5年)
 ⑭忠誠、⑮忠敬、同室合祀=□慈院殿前蓮社照誓輪誠信大居士、英祥院殿蓮社光誓明慈照大姉、興徳院殿前蓮社仁誓後翁忠敬大居士、富岳院殿蓮社徳仁阿妙□大姉、駿州沼津城主従四位下源忠誠公、従三位子爵源忠敬公(〃=慶応3年、明治40年)

鶴牧水野家(寛政譜6-60=15,000石)
 ①忠増はか合祀=覚了院殿前周州太守法誓性蓮大居士(宝徳印塔およそ3m=元禄7年)

□周防守墓碑銘

寺嶋家文書を解説
 旧八幡村主



発行された「沼津の古文書研究第5集」

市原 八幡・五井地区

市原市八幡・五井地区などに残る古文書を研究するグループ「沼津の古文書研究会」(山岸弘明代表、5人)がその成果をまとめた「沼津の古文書研究」の第5集を発行した。目玉は旧八幡村主・寺嶋家の文書。維新初期の第一級史料からは乱暴者が横行した村の緊迫した様子や、今まで不確かだった房総知事の本陣の場所が初めて明らかになった。「梅谷家文書」は珍しい一般農家の文書。いずれにも分かりやすい解説がついており、当時の庶民の暮らしが楽しく理解できる。

古文書研が第5集発行

同研究会は同市史編纂にも携わった郷土史研究家 秋葉平さんを講師とする沼津市立八幡公民館のサークル「古文書研究会」の有志が2009年に結成。かつて市原の中心地でありながら、都市化により多くの史料が失われた八幡・五井地区の文書を掘り起こし、その解読と研究に取り組んできた。成果は04年発行の1集から計4冊にまとめられ、今回の5集は約2年ぶりの発行となる。

今集の「目玉」「寺嶋家文書」は、江戸中期以降に名主を務めた旧八幡村主の名家で見つかった。江戸から明治にかけての同家の文書類はほとんどが原書類に寄託されたが、今回は同家、同館の協力で二般公開に先立って調査解読を許された。

維新期の戦乱に、江戸平が八幡本陣を構えた期間

楽しんで

ホテルの幻想的な発光ショーを兼ねるイベントが、いよいよ沼津の沿線で相次ぎ開かれる。

一つは「源氏平」の「観賞の夕べ」。29日、6月5日の午後7時、沼津市史編纂部で開かれる。

イベント

巴が必要。同鉄道沿線活性化協議会が沿線の自然を生かし、鉄道利用客の増加を図るため主催する。今年で3回目。最寄り駅は「環境保護」などの観点から内蔵して



活動の成果をまとめた「沼津の古文書研究会」のメンバー

と場所が、先が残ったメッセージ。貴重な文化遺産を守り、記録の文書で、初めからその代に多くの人に郷土史を楽しく理解してもらいたい」と話している。

「梅谷家文書」は同研究会が初めて解読する一般農家の文書。江戸から明治にかけての商品を売買した領収書やメモなどからは庶民の生活ぶりがかかっている。

高橋生と協力し、花壇植え替え。木更津市の国道16号脇の花壇で21日、講西の花の会